The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<書評>川嶋園子著『”扇”-扇文化の成立と生産地としての京都-』
Author(s)	鈴木, 佳子
Citation	デザイン理論. 2002, 41, p. 131-132
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52912
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

川嶋園子著
『“扇”── 扇文化の成立と生産地としての京都 ──』
丸善株式会社大阪出版サービスセンター　2002年

鈴木佳子／京都女子大学

扇に関する文献は非常に少ない，その現状において研究テーマとして取り上げた川嶋氏は京都に生まれ，自らが日本画を学んだことと，無関係では無いと思われる。

扇が何より大好きなこと，その描かれた扇面の絵は日本画の材料に等しく，古来から有名な画家により描かれた物が多く存在する。しかし，その研究書は少ないことで知られている。本書の序章でも語られている通り，伝統工芸品である扇は個人により，最初から最後まで仕上げる物ではなく，数多くの職人により，高度に分業化した社会の中で，産地としての誇りを持って作られてきた物である。

第1章には，扇の発生から歴史をたどり，1．木簡起源説　2．さしは起源説　3．笏起源説　4．びろう扇起源説　5．ビンサラサ起源説，などいろいろの方面から発生の起源を探っているが，1．の木簡起源説に重きを置き文字との関係，またパピルスや紙との関係にも言及し，書写材料として木簡から檜扇へそして紙扇へと展開した扇の道筋を示している。

第2章のメディアとして見た扇では，日本における扇の意味を論じている。

時代を象徴する扇と考えて，古代・平安時代以前，平安時代，鎌倉時代，南北朝時代，室町時代，桃山時代，江戸時代，明治以後とその時代を表象する図や写真と共に解説してあるのが，おもしろい。また同じ章の中で，古典芸能の中で生きる扇にも論述している。特に，能　狂言　日本舞踊のプロの持つ扇は，大部分京都の十松屋福井に依存している現状を語っている。これらは，流派により扇絵の内容が少し変わっていたり，扇骨の親骨の部分が各流儀の彫り（透かし彫り）が入れられたりする。約束事の多い世界である。

第3章　扇に用いられる材料とその加工方法を詳しく述べている。

扇骨の加工　扇骨に適した竹は「3年生のマダケ」で割裂性・弾力性・堅密性・伸縮性が要求される。しかしマダケが少なくなったので，島根産のモウソウチクに頼っている。（本書の巻末にマダケとモウソウチクの特性比較が載っている）

紙の加工　地紙（合わせ地・糊地）合わせ地は3枚または5枚沈糊で張り合わせたもの，芯紙は中心で柔らかい繊維が絡まっている物，糊地は沈糊（ジンノリ）で下引きし，濃いめの糊地のりに雲母を入れたもので上引きし，石台の上に置いて木づちで数十回打って紙の癖を直すと共に，紙に艶を出す方法である。

そして，組み合わせて仕上げる方法などを写真を入れて，解りやすく述べている。初めて扇のことに興味を持つ人にも十分理解出来るように書かれている。すべてが分業の世界だから順を追ってその工程を探るのは，ずいぶん時間と労力のいる仕事だったと思われる。また加飾（扇型の地紙に装飾を加える工程）の部分に於いても，数多くの職人達の分業で成立している。箔押し職人・上絵師・つき師（木版の型を彫ることを専門にする人）・刷り師など日本画と同じような画材を用いて描いている。これらの人々は京都扇子加工共同小組合（略して小組合）という組織に属し，その中の上絵部門では毎年練成会や展覧会などを行って，新しい方法や技術の伝承を図って

いる。加飾の次は折り加工（昭和の初期から折りにも専門化が始まり，夏扇専門・舞扇専門・絹扇専門と分かれていった。

折り加工の工程　1．開口あけ（元口開け）　2．湿り取り　3．折り加工　4．はたおち（両端打ち）　5．折り返し（舞扇のみ）　6．仮ぜき　7．乾燥　8．中差　9．本ぜき　10．万切り　11．紐かけ　折り畳んだまま紐をかけ仕上げ屋の所へ運ばれる。仕上げ工程　1．先金押し　2．うまをかける　3．地吹き　4．中附け　5．先つみ　6．先たたき　7．万力掛け　8．親だめ　9．せめ紙　となり，どの部分を取っても大変な技術の連続と言えよう。

第4章では産業としてみた扇。扇座から扇子団扇商工共同組合へという歴史の流れと四国の丸亀との比較も為されている。また江戸時代末期にはアメリカへの輸出・パリ万国博での評価で世界的に有名になるも，世界大戦で減産へと傾く。

扇のブランド性にも絡んでいて，京都の地場産業としての提言もなされている。

最後は著者の研究されていた神戸芸術工科大学の芸術工学との関係で材料の竹の特性比較（マダケとモウソウチクの比較）がデータとして載っていて，単なる歴史書との違いを感じさせられた。

資料の少ないこの分野で，実工程をくまなく見学したり，古い資料を訪ね歩いたりして，整えられた本書は扇の研究書として貴重なものと考えられる。